様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　８ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ０１２００

研究課題名（和文）ヒマラヤ地域における所有－社会的制御能の系譜学的研究

研究課題名（英文）Genealogical Study of Possession-Social Control Capability in the Himalayan Region

研究代表者
橘　健一（Tachibana, Kenichi）

立命館大学・政策科学部・非常勤講師

研究者番号：３０４０１４２５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、既存の「所有＝社会的制御能」という概念を再検討し、所有は「眼差し＝力」であるベクトルとその両端にある「与えー与えられる」存在の組み合わせからなるもので、その「与え＝与えられる」存在の相互的な関係が、歴史によって一方的な流れにされてしまうものと捉え直した。そこから本研究はネパール先住民のアニミズムとシャーマニズム、ネパールの山地ヒンドゥー教、インド先住民の首狩り実践、チベット仏教、近代的な開発に関わる所有ならびにその歴史についての調査研究を進め、ヒマラヤ地域における所有形式の多様性とその系譜を仮説的に示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
こんにち資本主義が前提とする私的所有がもたらす格差の拡大などの諸問題が論じられている。本研究では、ヒマラヤ地域の事例から所有とは何なのか、その根本から考えなおし、それが存在の問題にも深く関わっていることを示した。また、そのあり方が「与えるー与えられる」「光ー影」「見えるものー見えないもの」などに関わりつつ、地域や時代状況によって、変わっていくことを論じた。私的所有を相対化し新たな所有の可能性を探るための、ひとつのステップになった研究だと言える。

研究成果の概要（英文）：In this study, we reexamined the existing concept of "possession = social controllability," and redefined possession as consisting of a vector, which is "perspective = power," and a combination of "giving and being given" at both ends of the vector, and the mutual relationship between these "giving and being given" entities, which is made into a one-way flow by history. The study was based on this view. From there, this study investigates possession and its history in the context of Nepalese animism and shamanism, Nepalese mountain Hinduism, Indian headhunting, Tibetan Buddhism, and modern development, and hypothesizes the diversity of possession forms and their genealogy in the Himalayan region.

研究分野：文化人類学

キーワード：所有　ヒマラヤ　アニミズム　シャマニズム　ヒンドゥー教　開発　存在論　圏論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の人類学的議論は、物的対象や自然にも主体を認めることで、対象／認識、自然／文化などの二項対立を批判的に捉える地平を開いた。しかしながら、そうした議論においても西洋近代が一様な物として扱われがちで、近代と前近代、あるいはアニミズムと自然科学のあいだに、二項対立的な関係を温存してしまっているように見える。それは、時間や歴史の問題への対応が不十分なためだと考えられる。

言語学者バンヴェニストは、「相互に自己が反射する対話–共感の場」から成り立つディスクール的時間とクロニクル的時間による対立の問題を提示している。ディスクール的時間は、静止した時間–空間、固定的な記号の論理であるクロニクルな時間に組み込まれる。だが、それは静止した時空、記号論理の改編を生みだす可能性をもたらす。また、暦が様々であるように、クロニクル的時間も多彩な様相を示すとする（『言葉と主体』 2013）。

この議論から、対象、自然に主体を認めて共感の場を分析するだけではなく、それがどのようなクロニクル的な枠組みと、どのように関わっているのか明らかにする必要性が浮かび上がる。それは暦中心の歴史を排除するのではなく、その歴史を動揺させ別の歴史の可能性を探求する試みとなり、バンヴェニストが展開した印欧語の系譜学に連なるものとなる。

グローバル化が日々進展する現在の情勢のなかで、その根底にある資本主義の抱える諸問題の探求が求められている。そうした状況に鑑み、本研究では資本主義の根本を支える「所有」の問題に注目する。所有は、ディスクール的時間同様、自己の能力や権限を他者と相互に反射しつつ構成される部分と、クロニクル的時間同様、特定の基準をもとに権利として登録される部分から成り立っていると考えられる。そうした所有の二つ側面の諸関係は、歴史的にどのように構成され、変動してきたのだろうか。

本研究で注目するヒマラヤ地域は、地形によって物理的移動に困難が伴うことから、資本主義の周縁とされる場所である。しかし周縁地域だからこそ、資本主義が前提とする私的所有とは異なる所有のあり方や私的所有による資本蓄積の歴史とは異なる道筋を見出せるのではないか。それが本研究の根底にある学術的問いである。

２．研究の目的

近年の所有に関する議論として、所有を諸力の交渉の場と捉えるもの（松村圭一郎 2008『所有と分配の人類学』）や自然の生産能と人間の知的生産能のハイブリッドが調査地の社会と近代社会で異なることを示すもの（Marilyn Strathern 1999 Property, Substance and Effect）などが注目されている。本研究では、そうした議論も参考にしつつ、それらが近代批判のために用いる「非近代対近代」の以外の比較軸を用いる。それが「地域」という軸である。研究代表者は、これまでのネパール社会の調査で、民族の同一的な枠組みを分断する地域、あるいは異なる民族を結びつける地域という枠組みが現地で認識されていることを確認している。そうした枠組みは、河川などの自然環境とその利用、交易関係、婚姻関係、そして徴税などの政治的統治等の差異から構成されているように思われる。これは、リーチが「高地ビルマの政治体系」で示した「地域」に重なる概念である。

本研究は、そうした地域内部の多様なアクターのネットワークのあり方を探ることで地域間の所有のあり方の差異を捉え、さらに、それが展開していく歴史を示しつつ、その歴史を批判的に捉える系譜学を提示することを目指す。その際、「ヒマラヤ」と「ヒンドゥスターン平原」、あるいはスコットの論じる「ゾミア」（2009）といった地域的な差異に留意する。

所有概念については、社会学分野で所有を包括的に論じた議論として知られる吉田民人の「所有構造理論」（1981）を参考にする。吉田は、所有の定義をマルクスから援用しつつ、所有の根底に「社会的制御能」という微細な力を想定し、その制御能の主体・客体・内容・帰属のあり方が多次元・多段階に包括化-分割化されて多様な所有の構造が生みだされるとした。そうした吉田の議論も具体的な事例から批判的に再検討し、その精緻化を試みる。

３．研究の方法

研究代表者は、ネパール中部のチェパン社会の山村を対象に、狩猟、採集、漁猟、イモ栽培、雑穀栽培といった生産活動や、それに対する分配や徴税の歴史の調査分析を進め、それらにおける多様な所有–社会的制御能、特に、動物や自然の制御能と人間の制御能、個人の制御能、親族、近隣関係の制御能、村という枠組みの制御能と政府の国家的制御能、開発に関わる国際社会の制御能と、それぞれの関係パターンの歴史的変動を明らかにする。また、チェパン社会の所有の地域的な差異とその系譜を明らかにし、比較検討を行う。

これまで東ネパールの牧畜民が混住する山村で調査研究を進めてきた研究分担者（渡辺）は、従来の調査地域における遊牧を中心とした所有–社会的制御能の調査分析をおこなう。さらに調査領域を周辺山村にまで広げ、地域内外での所有、諸社会的制御能の関係の比較をおこない、地域による比較研究を実施する。

これまでインド・ラダックのチベット難民芸能集団の調査を続けてきた研究分担者（山本）は、引き続き、芸能活動全般の社会的制御能の調査研究を行い、理論的な整理を行う。さらにチベッ

トの生業や仏教に関する所有、社会的制御能の調査をおこない、多様な国家権力のあり方を調査する。

最終年度には、ネパールやインド北西部との比較検討を全員でおこない、研究代表者の狩猟採集から農業に関する所有の調査、分担者の遊牧、芸能、仏教の所有に関する調査を統合し、異なる生産活動における諸社会的制御能の関係パターンの地域的差異を踏まえた所有−社会的制御能の系譜学的研究をまとめる。

本研究では、2018 年度から 2021 年度まで、研究代表者と分担者全員がネパールやインドでフィールドワークを実施する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス感染の拡大により、2019、20，21 年度にそれが不可能になり、一年間の延長許可を得て、2022 年度まで研究を継続した。結果的に、2018，2022 年度のみ、フィールドワークを実施することになり、それ以外の期間は文献研究と代表者・分担者間のオンラインでの研究会が中心となった。

４．研究成果

2018 年度は理論的整理を進め、吉田民人『主体性と所有構造の理論』における「社会的制御能」とドゥルーズ=ガタリの「機械」概念を比較検討し、さらに國分功一郎の「中動態」の議論と松村圭一郎の所有に関わる複合的「おそれ」の接続可能性について検討した。また、エマニュエル・トッドの家族研究で、人口・家族構造と相続のあり方と国家イデオロギーのあいだの相関が指摘されていることを取り上げ、ネパールの税制の変化と人口、家族と相続との関わりについて討議した。ネパールのフィールドワークでは、先住民チェパン社会の狩猟に関わる所有の問題、ラナ専制時代のチェパン社会内部の徴税の地域的な差異を調査した。また、パルバテヒンドゥー社会において owner を示す言葉 swaami が、女性にとっての夫(主人)をも意味すること(ヒンディー語も同様)や親族内における男性中心の地位や所有のあり方を確認した。さらに結婚した女性の持参金の一部が、女性の個人財産 pewa として認められていること、その制度がネパールの山地のヒンドゥー教徒高位カーストからチェパンやグルンなど山地の先住民まで広く共通してみられること、ヒンディー語には pewa の概念が見られないことを確認した。その他に、近年の女性に相続を認める法改正、女性の海外出稼ぎが男性中心の所有のあり方にどのような影響を与えているか検討を始め、山岳観光と移牧を巡る共同所有の問題、チベット難民歌手によるコピーライト言説や消費者の対応についても検討を進めた。

2019 年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響によりフィールドワークを実施することができなかったため、文献調査と、これまでフィールドワークで収集した資料の整理と再検討を進めた。すでに調査していたネパールのチベット・ビルマ語系先住民が違法に森林を伐採し住み着いた事件を再検討するなか、それが国政における例外的な存在の所有権の主張と結びついていたことと、その主張の背景に一部の森林に対する例外的な所有権の歴史が関わっていること、さらにその歴史がネパールの政治的枠組みが生政治への転換したことに大きく関わっていることを明らかにした。そこから例外的存在と例外的領域から所有の問題がどのように見えるのか、そうした例外性がどのように所有の枠組みを開いていくのか検討した。また、所有や制御能、あるいは主体概念の言語文化的な比較検討を開始した。特にヒマーラヤ地域に関わるインド・アーリア語系とチベット・ビルマ語系文化との比較を検討の中心とし、その違いが宗教や家族構造、イデオロギー、さらには存在論とどう関わるのかも念頭に置きつつ、資料分析を進めた。

2020 年度も、新型コロナウイルス感染拡大の影響で海外調査を実施できなかったが、文献研究を進め、これまでの研究成果を整理しつつ共同で理論的考察を進めた。まず、アニミズム的な実践をおこなうことから「未開」扱いされるヒマラヤ先住民をサバルタンと捉え、スピヴァクらが推進するサバルタン研究の内容を精査し、アニミズムの意識に迫るために「与える−与えられる」という所有の過程で組織される存在論的な表現を把握する必要が説かれていることを確認した。そこから社会的制御能に替わり、「与える−与えられる」にヴィヴェイロス・デ・カストロの論じるパースペクティブあるいは眼差しを加えたベクトル表記によりアマゾニアの食人と結びついたアニミズムとヒマラヤ先住民のシャマニズムと結びついたアニミズムの比較検討をおこない、前者で獲物の世界から捕食者の世界にもたらされる「ベクトル＝眼差し＝力」を自らの所有とするための「闘争」的な時間が見られるものの、ヒマラヤでは獲物の「ベクトル＝眼差し＝力」を逸らすシャマニズム的な時間が展開していることがわかった。

そこからヒンドゥー的な供犠や言説などを比較検討し、それらが自然/文化の対立による自然主義的な時間を前提とすることを確認し、それが家畜の供犠などによる自然から文化への「ベクトル＝眼差し」と結びついていることを見出した。さらに近代的開発言説の分析も進め、そこでも自然/文化の対立が見られることと、ヒンドゥー的な図式とは異なり、そこには未来に向けた文化の「ベクトル＝眼差し」が伴っていることを見出した。また、チベット・ビルマ語系のアニミズムとインド・アーリア語系のヒンドゥーの所有（ベクトル＝眼差し）のあり方の比較を言語学的な成果も含めて精緻化しつつ、より多角的に検討を進める必要があることを確認した。

2021 年度も新型コロナウイルス感染拡大の影響で、国外フィールドワークを実施することができなかったため、引き続き文献研究を進め、共同研究者間での議論を進めた。ネパールの歴史資料から、先住民のゆるやかな所有(共有)感覚に、恐怖の対象からの避難という視点が関わっていること、逆に王国を築くヒンドゥー教徒のなかには石壁による防衛という視点が関わっていることを見出し、さらに震災などの集団的な避難が防衛された所有領域を開くことを確認した。さらに理論的な検討で、ヒマラヤの狩猟採集に関わる所有（ベクトル＝眼差し）の問題が、数学

の圏論(category theory)やハーマンによるオブジェクト指向存在論と多くの部分で重なることを確認した。両者に関する議論で、対象にされない「外部」を記述に含めることの重要性が指摘されており、それをヒマラヤ地域の所有の問題とどう結びつけることができるのか、討論をおこなった。そのなかで、マルクスの原始共産制論では、定住生活以前の集団が食糧や道具などの供給地を防衛・共有することを基礎としているが、ヒマラヤの避難の視点とともにある半定住的生活における共有は、「外部」としての諸存在の眼差しへの共感と、その眼差しによって対象とされる恐怖が基礎となっていることを確認することができた。 そうした外部的存在に対する共感や恐怖は、アニミズム(パースペクティヴィズム)やシャマニズムの世界とも結びついている。マルクスは民衆による現実の社会改革を妨げるものとして唯物論的に宗教を批判したが、定住以前の共有を支えるのも、そうした亡霊と結びついた宗教的なものだということになる。その点から、マルクス自身が亡霊に取り憑かれていたと見るデリダの憑依論も検討に加えることになった。

2022 年度は、ようやく新型コロナウイルス感染拡大が落ち着き、8-9 月、12 月にネパールでのフィールドワークが可能となった。当初の予定をすべてこなすことはできなかったが、代表者はネパールの先住民チェパンの狩猟採集やアニミズム、シャーマニズムなどについて、分担者 2 名はそれぞれチベット難民社会における焼身自殺とヒマラヤにおける野生動物と人間関係について調査研究を実施し、論文を記した。

また、所有がどのように開かれていくのか検討するなか、ネパール大震災からの復興の問題に改めて注目し、レジリエンスが存在の階層（動物-人間-共生-村-国家）を下っていくことに結びつき、それが所有を開いていく可能性を示すことを見出した。それについて現在報告書を作成中である。

最終年度のまとめ作業として、代表者と分担者で、所有と主体、自己組織化と階層化、レジリエンスと階層秩序からの避難、対象–主体関係と数学の圏論や新実在論との関わりについて議論した。さらに、ヒマラヤ地域における狩猟採集と家畜飼育、科学技術や資本主義、あるいはアニミズム、ヒンドゥー教、仏教、キリスト教による主体–所有関係の差異を整理し、それらが労働や貨幣とどう関わるのか、それぞれの系譜関係と相互関係はどうなっているのか議論した。それをもとに、新たな民族誌的記述を進めている。

本研究を進めるなか、代表者はチェパン語の文法についてオレゴン大学に博士論文を提出した言語学者ポンス博士と協力関係を築くことができた。それにより、これまで録音してきた狩猟採集やアニミズム、シャーマニズムに関わる会話やインタビューならびに神話語りの文字起こしとネパール語と英語、日本語への翻訳作業を、現地の協力者の助力も得て、始めることができた。研究代表者は、その成果を踏まえて、新たにチェパンの夢に関わる言語表現と存在論について、ポンス博士の協力を仰ぎつつ、新たな研究プロジェクトを開始し、基盤研究（C)に採択されている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 橘健一	４．巻 802
２．論文標題 ネパール語を翻訳するのは誰か？	５．発行年 2022年
３．雑誌名 月刊「地理」	６．最初と最後の頁 45－51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山本達也	４．巻 33
２．論文標題 書評論文「古川不可知『シェルパと道の人類学』」	５．発行年 2022年
３．雑誌名 南アジア研究	６．最初と最後の頁 65-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺和之	４．巻 1
２．論文標題 ヒマラヤにおける 2 つの羊毛敷物：チベット絨毯とネパールのラリの生産と流通	５．発行年 2021年
３．雑誌名 国際ファッション職専門大学紀要	６．最初と最後の頁 33－42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 渡辺和之	４．巻 45（12）
２．論文標題 羊毛を運ぶ背負いかごドコ	５．発行年 2021年
３．雑誌名 月刊みんぱく	６．最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺和之	４．巻 34
２．論文標題 「動物を神に捧げ、共食する：南アジアの祭礼と諸宗教間での肉食観の違い」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 ビオストーリー	６．最初と最後の頁 46-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 渡辺和之	４．巻 32
２．論文標題 伝統野菜をどう支えるか	５．発行年 2019年
３．雑誌名 ビオストーリー	６．最初と最後の頁 44-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計35件（うち招待講演　1件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 橘健一
２．発表標題 コメンテイター「ヒマラヤ地域研究の最前線」
３．学会等名 2021年第１回ネパール・ヒマラヤ研究会
４．発表年 2022年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 「リ／ゾナンスへの人類学的アプローチ・音楽とパフォーマンスのフィールドから」分科会コメンテーター
３．学会等名 日本文化人類学会第55回研究大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 焼身自殺者を哀悼する－難民社会での焼身自殺への応答に関する考察
３．学会等名 京都大学東南アジア地域研究研究所2021年度IPCR（萌芽型Ⅳ）採択課題「共生的関係の発露をめぐる地域間比較研究：東南アジアの境界域および紛争経験社会における移民・難民と身体に着目して」
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 シンポジウム　ヒマラヤにおける生き物と人－野生動物・家畜・人のコンタクトゾーン－趣旨説明：移牧から見る野生動物・家畜・人の関係
３．学会等名 生き物文化誌学会・学術大会2021（国立民族学博物館）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Kazuyuki Watanabe
２．発表標題 Pack Animals and Tourism: Preliminary report about use of transportation in case of Nepal Himalaya.
３．学会等名 Global Land Project conference 2021. 16 September 2021, Online.
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 ヒマラヤ家畜回廊：祭礼に伴うネパールを中心とした畜産物の流通と広域経済
３．学会等名 フィールドネットラウンジ「みんな、ここを通った」戦争・交易・巡礼から見るヒマラヤ交易路の盛衰史（東京外国語大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 「コメント」九州山地の生き物と人：佐々木高明と焼畑文化複合に注目して
３．学会等名 生き物文化誌学会・焼畑例会（国立民族学博物館）
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 災害に負けない人びとの営み：2015年ネパール大地震の事例から
３．学会等名 羽曳野市民大学（LICはびきの）（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 国境を越える家畜：インド・バングラデシュ国境における牛交易
３．学会等名 日本地理学会（東京大学）
４．発表年 2022年

１．発表者名 橘健一
２．発表標題 チェパン存在論の潜在力-ヒンドゥー的、近代的存在論の地平展開の試み
３．学会等名 研究会「南アジア・ヒマーラヤ地域から存在論的民族誌の可能性を探る」
４．発表年 2021年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 けんか祭りの変容 富山市・岩瀬曳山車祭り
３．学会等名 日本文化人類学会分科会：祭礼における「脱暴力化」の研究
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 インド・バングラデッシュ国境における「セミ・リーガル」な家畜交易：ヒマラヤの家畜回廊に関わる調査３
３．学会等名 生き物文化誌学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 伝統野菜をどう支えるか？：和歌山県湯浅町における湯浅なすの復活
３．学会等名 生き物文化誌学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 ２つの羊毛敷物：チベット絨毯とネパールのラリの生産と流通
３．学会等名 公開講座：シンポジウム「インド・ファッションの世界：素材から考える装い」、国際ファッション専門職大学名古屋校舎/ 名古屋モード学園
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 南アジアにおける供犠と肉食の現在
３．学会等名 池谷先生の還暦を祝う研究会：阪南大学
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 動物を神に捧げ、共食する：南アジアの祭礼と諸宗教間での肉食観の違い
３．学会等名 生き物文化誌学会東京例会シンポジウム「命を見る目線」
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 宗教的祭礼と家畜交易：バングラデシュ・インド国境における牛交易の事例
３．学会等名 日本地理学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 インド市民権を求めて－アトム化するボーダナート在住チベット難民の生きる道
３．学会等名 2019年度フィールドネット・ラウンジ企画
４．発表年 2020年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 Commemorating a Self-immolator: A Case Study of Responses to Self-immolation in a Tibetan Refugee Society in India
３．学会等名 The 11th INDAS South-Asia International Conference（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 Negotiating Citizenship: a Case Study of Tibetan refugees in India and Nepal
３．学会等名 日本南アジア学会第32回全国大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 Citizenship under the dual legal system: a case study of Tibetan refugees in India and Nepal
３．学会等名 The 11th International Convention of Asian Scholars（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuyuki Watanabe
２．発表標題 Damages of Nepal Earthquake for the Villages along Trekking Route: Cases of Gosainkund and Helambu.
３．学会等名 International Conference on Mountain Development in a Context of Global Change with Special Focus on the Himalayas 2018.（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 「ヒンドゥー教の秋の大祭ダサインとチャングラ山羊」
３．学会等名 生き物文化誌学会、立正大学品川キャンパス
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 「タマン・ヘリテージ・ルートの被災と復興状況」
３．学会等名 2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第３回研究会、国立民族学博物館
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazuyuki Watanabe
２．発表標題 Communal Land Use of Transhumance and Tourism: A Case of Annapurna Southern Slope in Central Nepal.
３．学会等名 Session 2: Changing Societies under extreme environments in Asia, GLP Conference. Taiwan National University
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 「宗教的祭礼が促進する家畜交易：ネパールのカトマンズにみるヒンドゥー教の秋祭でのチャングラ山羊」
３．学会等名 日本地理学会、和歌山大学
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kazuyuki Watanabe
２．発表標題 Comment for the Study of Climate Change.
３．学会等名 Monthly Seminar: North East Asia Project. Theme: Climate Change and Nomadic People in Afro-Eurasia, National Museum of Ethnology, Osaka.
４．発表年 2018年

１．発表者名 渡辺和之
２．発表標題 「山岳観光と移牧：中部ネパール、アンナプルナ南麓における事例」
３．学会等名 日本地理学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 渡辺和之・池谷和信
２．発表標題 「趣旨説明：自然と人間の関わりの地理学 －環境研究と社会連携－」
３．学会等名 日本地理学会春季シンポジウム
４．発表年 2019年

１．発表者名 Kazuyuki Watanabe
２．発表標題 Earthquake Damages and Socioeconomic problems in Nepal 2015.
３．学会等名 Seminar: Problems and prospects of Socio-Economic Development at Macro Level, Haji Abul Hossain Institute of Technology, Tangail, Bangladesh.
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 チベット仏教から見るトランスヒマラヤのダイナミクス
３．学会等名 南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS）2018年度「宗教」班 第1回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山本達也
２．発表標題 難民社会における個の刻印 ― 作品をめぐるチベタン・ポップ歌手の実践から
３．学会等名 南アジア地域研究国立民族学博物館拠点（MINDAS） 「音楽・芸能」班 2018年度第2回研究会
４．発表年 2019年

１．発表者名 橘健一
２．発表標題 「チェパン山村の被災・復興状況―チトワン・ダーディン・マクワンプールの比較から」
３．学会等名 2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第３回研究会、国立民族学博物館
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kenichi Tachibana
２．発表標題 Livelihood and life of indigenous people of Nepal- A case of Chepang village
３．学会等名 Seminar: Problems and prospects of Socio-Economic Development at Macro Level, Haji Abul Hossain Institute of Technology, Tangail, Bangladesh
４．発表年 2019年

１．発表者名 橘健一
２．発表標題 「震災後の家屋の再建とライフスタイルの分岐－チェパン山村の事例から」
３．学会等名 2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究第４回研究会、国立民族学博物館
４．発表年 2019年

〔図書〕　計21件

１．著者名 山本達也	４．発行年 2022年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 512
３．書名 「国民国家の暴力が生み出した地位を生きる人々」『現代アジアを掴む』	

１．著者名 山本達也	４．発行年 2022年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 296
３．書名 「運命的瞬間が人を歌手にする」『官能の人類学』	

１．著者名 橘健一,他	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 456
３．書名 インド・剥き出しの世界	

１．著者名 橘健一,他	４．発行年 2021年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 368
３．書名 世界を環流する〈インド〉	

１．著者名 山本達也,他	４．発行年 2021年
２．出版社 春風社	５．総ページ数 456
３．書名 インド・剥き出しの世界	

１．著者名 山本達也,他	４．発行年 2021年
２．出版社 青弓社	５．総ページ数 368
３．書名 世界を環流する〈インド〉	

１．著者名 山本達也,他	４．発行年 2021年
２．出版社 臨川書店	５．総ページ数 430
３．書名 チベットの歴史と社会　下	

１．著者名 橘健一,他	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 404
３．書名 現代ネパールを知るための60章	

１．著者名 渡辺和之,他	４．発行年 2020年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 404
３．書名 現代ネパールを知るための60章	

１．著者名 Tatsuya YAMAMOTO,他	４．発行年 2020年
２．出版社 Lexington Books	５．総ページ数 294
３．書名 Resistant Hybridities: New Narratives of Exile Tibet	

１．著者名 Tatsuya YAMAMOTO,他	４．発行年 2021年
２．出版社 Kyoto University Press & Trans Pacific Press	５．総ページ数 204
３．書名 An Anthropology of Ba	

1．著者名 橘健一	4．発行年 2020年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 296
3．書名 「ヒマーラヤ地域」『ようこそ南アジア世界へ』	

1．著者名 山本達也	4．発行年 2020年
2．出版社 集広舎	5．総ページ数 312
3．書名 「難民として生きる――国籍との抜き差しならぬ関係」『マルチグラフト―人類学的感性を移植する』	

1．著者名 山本達也	4．発行年 2020年
2．出版社 昭和堂	5．総ページ数 296
3．書名 「文化―人びとが日々生きている多様性」『ようこそ南アジア世界へ』	

1．著者名 末原達郎・渡辺和之	4．発行年 2018年
2．出版社 桂書房	5．総ページ数 233
3．書名 「岩瀬曳山車祭り：「地域アイデンティティーの再生」阿南透・藤本武（編）『富山の祭り：町・人・季節輝く』	

１．著者名 Tatsuya Yamamoto, Tomoaki Ueda	４．発行年 2019年
２．出版社 Palgrave Macmillan	５．総ページ数 222
３．書名 Law and Democrary in Contemoprary India: Constituion, Contact Zone, and Performing Rights	

１．著者名 山本達也	４．発行年 2019年
２．出版社 集広舎	５．総ページ数 248
３．書名 「フィールドでの関わり、立体化する政治」『ラウンド・アバウト―フィールドワークという交差点』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	渡辺　和之 (Watanabe Kazuyuki) (40469185)	阪南大学・国際観光学部・准教授 (34425)	
研究分担者	山本　達也 (Yamamoto Tatsuya) (70598656)	静岡大学・人文社会科学部・准教授 (13801)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関